

全校の皆さん、おはようございます。

新緑がより深まり、アルプスの残雪と鮮やかな緑のコントラストが最も美しい季節となりました。厳しい冬を越え、春の陽気に誘われて一気に開花した花々が美しく咲き誇っています。

さて、新年度が始まり二カ月がたちました。楽しみや不安が入り混じったあの時に比べれば、少しは学校生活に「慣れて」きた人もいるでしょう。その一方、「慣れてきた」ことによって、新鮮さが失われ、いろんなことが馴れ合いになっているところもあるのではないのでしょうか。

『歎異抄』という書物の中に、「よろこぶべきことをおさへて、よろこばせざるは煩惱の所為なり」という言葉があります。これは、「よろこぶべきことをよろこべないのは、私自身の煩惱のしわざである」という意味で、親鸞聖人が門弟の唯円に語りかけた言葉です。

私たちが生活していく上で、「慣れる」という行為は、友人との関係を穏やかにさせたり、仕事の能率を上げたりする上で重要な行為です。もし物事に「慣れる」ことができなかったとしたら、常に、大きな不安に自分をさらし続けねばなりません。ですから、適度に「慣れる」ということは、積極的な生き方をする上で必要不可欠といえるでしょう。

しかし、「慣れる」ことで物事に集中できず、ダラダラとダラしない生活をしてしまったり、自分のやりたいことや好きなことだけに気を取られたりして、自分自身の現実が見えなくなり、他人に迷惑をかけていることにも気づかなくなります。

このように物事に慣れると、そのこと自体に対する意識は薄くなり、最初頑張っていた頃の新鮮な気持ちや周囲への気配りを忘れがちになってしまいます。そして、その分、自分が今置かれている立場と別の方へ意識がいつてしまいがちになります。確かに、いろいろなことに興味を持ち、やりたいことにどんどん挑むといった姿勢は大切ですが、今この時、一分一秒も大切な時間であることにかわりはないのです。「今を大切に生きる」ということは、「慣れる」ことで気持ちの張りが薄れてしまった自分にとって、何よりも重要な意味を持つのではないのでしょうか。

親鸞聖人の唯円に語りかけたこの言葉は、物事に「慣れる」ことで他のことに目が移り、今の自分に目を向けて考えてみる心の余裕を失ってしまった私たちに今の時に生きる自分を大切にしない」と、語りかけているのです。いつまでも、自分自身の生活に新鮮さを失わず、生きるよろこびを忘れない生活を心がけたいものです。